



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ロシア国家による地方の併合過程 : バシキーリア併合の問題をめぐって
Author(s)	豊川, 浩一; Toyokawa, Koichi
Citation	スラヴ研究, 37, 177-207
Issue Date	1990
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5190">https://hdl.handle.net/2115/5190</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00000113315.pdf



# ロシア国家による地方の併合過程

——バシキーリア併合の問題をめぐって——

豊川浩一

## 序論

- 1 バシキーリア併合についての研究情況
- 2 併合研究の問題点と新しい動向
- 3 史料について

## I 併合前夜の情況

- 1 バシキーリアをめぐる16世紀の国際環境
- 2 バシキーリアの社会情況
- 3 ロシアとカザン汗国
- 4 カザン汗国崩壊後の動向

## II 併合過程

- 1 併合の経緯
- 2 併合受容についての問題点
- 3 併合受容の「条件」

## III 併合後の諸変化

- 1 ロシア国家とバシキール人社会 —— ヤサークと軍役
- 2 バシキール人社会の変化
- 3 17世紀のバシキーリア行政と叛乱

## 結語

## 序論

### 1 バシキーリア併合についての研究情況

1552年のカザン汗国の崩壊以後19世紀初頭までの間に、ロシア帝国の領土は、いわゆる「辺境」とされる民族地域の併合政策により飛躍的に拡大した<sup>1)</sup>。しかし、各地域の社会・経済的發展の段階は一樣ではなく、そのためツァーリ政府は政策遂行の方法・手段を幾度も変更せざるを得なかったし、それがある程度成功したのは特徴的である。それにもかかわらず、概して言えば、ロシア帝国はこうした「辺境」の役割を17世紀までは重視していたとはいえ、諸産業の發展に伴って植民の必要性を積極的に認識するのはやっと18世紀の「近代化」を推進するピョートル一世時代になってからであった。そして、この時以降、実質的に「辺境」をロシア帝国の一員に加えるため武力による一層強圧的な手段も採られたのである<sup>2)</sup>。19世紀に至り、ロシア帝国の植民政策の基本的な課題は、豊かな資源のあ

る民族的辺境をいわば「植民地」として「本国」の原料供給地に変えていくことであった<sup>3)</sup>。ここに、我々はロシア一国内に農奴制と民族的諸関係とによって重層的に形成される一種世界システムの相似形をみることはできないだろうか<sup>4)</sup>。

以上のような状況下で、ロシア帝国による民族地域併合のロシア史上における重要性は疑う余地がない。この問題はツァリイズムの植民政策にも影響を与えており、その研究はきわめて重要である<sup>5)</sup>。それらの研究では、各地域の併合は主に民族地域の人々の「自由意志」に基づく行動とみなされ、しかも併合はロシアと民族地域の経済・政治的發展において、特にその初期の段階では、重要な役割を果たしたとも述べられている<sup>6)</sup>。

こうした併合についての全般的な研究の流れのなかで、バシキーリア併合についての研究は次の二つの点から特徴的といえるのであろう。

まず第一にいえることは、併合を含めたその前後の15-16世紀についての専門研究が少ないということである。その理由として考えられるのは、ロシア語の史料が僅かしか存在しないこと、およびバシキール語やその他のチュルク語の史料的研究が完全に不足していることがあげられる<sup>7)</sup>。しかし、もっと大きな原因がある。15-16世紀前半の史料が、バシキール人とタタール人とを明確に区別していないことが研究を困難にしている。当時、バシキーリアはカザン汗国、シベリア汗国、ノガイ=オルダの三勢力によって分割されており、そのためこの住民は統一的な政治組織ないし機構を形成しなかった<sup>8)</sup>。それが自民族語で書かれたまとまった文書史料を、彼らが持たなかった原因である。また、彼らはカザン・タタール人やシベリア・タタール人とまったく同様にチュルク語民族グループに属しているが、史料（特にロシア帝国の年代記）のなかでは、タタール人やノガイ人とは必ずしも区別されていなかった。事実、年代記のなかだけでなく、当時の旅行家の記録においても、彼らは「タタール人」と呼ばれていたのである<sup>9)</sup>。

研究の第二の特徴は、バシキーリアの併合に関して伝統的に二つの相反する見方が存在しているということである。つまり、併合がバシキール人の「自由意志」によるものか<sup>10)</sup>あるいはロシア帝国の「強制」によるものか<sup>11)</sup>という二つの考え方である。この対立は、単に刊行史料が少ないということに原因があるだけでなく、研究者自身による史料批判およびその政治・思想的立場によって左右される。

帝政時代における「自由意志」説の代表者として G. M. ソロヴィヨーフをあげることができる。彼はカザン汗国支配下の五民族（チェレミス（現称マリ）人、モルドヴァ人、チュヴァシ人、ヴォチャーク人、バシキール人）の併合について記しながら、「カザン占領後のイオアン [=イヴァン四世] の最初の仕事は、これらの民族に対し、モスクワの臣民になること、つまり彼らがカザンに対してそうであった関係を〔モスクワと〕結ぶように勧める使者を派遣することであった。それに彼らは同意したのである<sup>12)</sup>」と述べた。

これに対し、「強制」説ないしは「征服」説を唱える研究者たちは、特徴的なことに地方の歴史家や郷土史家にそれが多いが、バシキーリアの併合をロシア国家による「征服」あるいは「侵略」によるものと考えている。たとえば、B. H. ヴィテフスキーは豊富な史料を駆使しながら、バシキール人は徐々に「征服」されていったと述べている。つまり、「カザン帝国の崩壊とともに、ノガイ人たちはロシアの権力に怯え、ヴォルガやウラルの

以東へ、またクバンへと逃がれていった。(中略) バシキーリアは一撃によって征服されることはなかったが、しかし事実我々がみるように、徐々に一步一步征服されたのである<sup>13)</sup>」と。そして、彼によると、僅かの中断があったにせよ、「ロシア政府と地方の異族住民 (инородческие населения)<sup>14)</sup>、特にその定住者であるバシキール人との間断なき闘いは二世紀以上続いた<sup>15)</sup>」という。

併合の時間的幅をどのようにとるかということによって、見解も分かれるであろう。しかし、併合問題に関しては、以上の二つの考え方の中間的な見解もあるが、大別すれば上記のように分けられよう。こうした論争はソ連時代に入ってからでも継承されている。

たとえば、18世紀のバシキール人叛乱の研究家 A. П. チュローシニコフは、「強制」説の立場からバシキール人が自らの意志によってロシア国家に臣従したとする考えを批判した。彼によると、ロシアのバシキーリア獲得は侵略と長期にわたる闘争の結果だとする<sup>16)</sup>。

これに対し、17世紀中葉のバシキール人の大叛乱を研究した Н. В. ウスチューゴフは「自由意志」説の立場から、バシキーリア併合の性格について触れ、次のような指摘を行っている。すなわち、「モスクワ・ツァーリへの臣従をバシキール人領主たちは主従関係と考えており、モスクワの皇帝を彼らが仕えねばならない自分の君主であるとみなした。この勤務も、またヤサーク支払いも自発的なものであったから、もし主従関係の状況が何かの理由で臣下にとって受け入れ難いものとなれば……この自発性には廃棄の権利 (право отъезда) も仮定されていたのである<sup>17)</sup>」と。

また、現代における併合問題の専門家 A. Н. ウスマーノフは同じく「自由意志」説の立場から、ロシア国家によるバシキーリア「侵略」という説が優勢だった背景には、研究者側に史料が不足していたことと並んで、彼らが何よりも諸民族の歴史におけるツァーリズムの有害な役割を示そうとする意図があったとした。彼らはツァーリ専制の植民的性格を強調しながら、バシキール人に対するツァーリ政府の陰の側面のみを取り上げ、その結果バシキール民族と大ロシア民族との有益な経済的・文化的接触の問題は明らかにされなかった。その点、相互影響力の視点が欠如していたという<sup>18)</sup>。

「自由意志」説は、現在のソ連では通説となった観がある<sup>19)</sup>。しかも、そうした見解はバシキーリアの場合だけではなく、他の地域についても同様に通説となっているのが現状であろう。

また、併合推進派の社会構成などの問題については様々な見解があるが<sup>20)</sup>、併合の歴史的意義についてソヴェト史学ではおよその意見の一致がみられる。それを、M. X. ラフマトゥーリンは次のように要約している。①カザン汗国支配下での法外なヤサークから分相応なヤサークへの移行。②商業活動の可能性が開かれたこと。③遊牧地の増大。④ロシアとの同盟による隣接遊牧民の攻撃からの防衛。⑤そして、全体として併合はバシキール人諸部族の利益にかなうものであった<sup>21)</sup>、と。

## 2 併合研究の問題点と新しい動向

しかし、以上のような併合に関する通説的解釈およびその進歩的意義の強調に対して、他方で、バシキーリア併合そのものについてではないが、次のように批判的に述べる現代

の歴史家がいることも事実である。いわく、「1552年以来、カザン汗国は主権国家として存在することを止めた。その領域と住民は、いかなる自治の徴候もなく、ロシア国家の一員となった。地方のそうした状況は、大十月社会主義革命まで存在した<sup>22)</sup>」と。

また、併合についての前節の通説的見解は、50年代のスターリン・テーゼを受け入れた結果といえるが、それに対する批判も現在現われてきている。すなわち、テーゼによって導き出された図式は、①非ロシア人はロシア国家への併合前夜（16世紀）においてはロシア帝国よりも発展しておらず、②併合は、概して言えば、「自発的」なものであり、③しかも、それは諸民族に「進歩的」な状況をもたらした<sup>23)</sup>、というものである。

これをC. X. アリシェフは、タターリアの場合についてはあるが批判している。まず、先の図式の第一点目について。彼は、併合をこの地方に対するモスクワ国家側の関心からよりも、ロシア国内の現象から考えるべきであるという。この地方におけるモスクワ国家の利害の対応は、ソヴェト史学がしばしば論ずるように、オスマン帝国の拡張に対する防衛的な対応でも、また15世紀以後の地方住民側からの援助要求に応える利他主義的な行動でもなかった。その利害は、むしろロシアの国内的要因によるものであった。つまり、土地への貧欲な欲求を持った領主の勃興にあった。アリシェフは、それを帝国主義そのものだと規定した<sup>24)</sup>。第二の点に関しても、その「自発的」という面を否定する<sup>25)</sup>。第三の点に関して。併合が、民族的な独立の喪失、独裁的な支配と植民地主義という二重の軛による従属、そして他の非ロシア人との正常な接触を阻害したとされるタタール人自身にとって否定的な結果を招いたことを無視ないしは軽視しないようにと説く<sup>26)</sup>。その際、彼は、中央沿ヴォルガ地帯の征服や併合を客観的にみて進歩だとみなす人々に次の相互に関連する二つの点を考慮に入れることを促す。一つには、進歩や正義の基準は必ずしも自明なこと、また普遍的なものではないということ。そして、いま一つには、特別な事件の帰結としての進歩的な結果というものは、必ずしもこれらのできごとを正当化するものではなかったということである<sup>27)</sup>。

こうした地方からの批判とは別に、中央においても最近になって新たな動きがみられる。カフカース中世史の専門家 A. П. ノヴォセーリツェフの「日ソ歴史学者シンポジウム——第九回会議」での発言はその顕著な例であろう<sup>28)</sup>。それは、吉田悟郎氏のソ連の歴史教育における民族の扱い方に関する質問に答えたものであったが、彼は「自発的併合」という問題を例に次の二点を指摘した。まず第一に、「自発的併合」を論ずる際に、各民族の状況および併合の様子について具体的に検討する必要性を強調した。つまり、最初から諸民族が「自発的併合」に向かったとすべきではなく、個々の事例毎に具体的に考案することが大事であるという。さらに、「自発的併合」よりは「臣従化(вассальтет)」の場合の方が多くあり、実際の臣従化の意味を問うべきであるともいう。そして第二に、「自発的併合」が客観的にいかなる歴史的意義をもたらしたのか、そちらの方を検討することがより重要であるとした。

以上の考えは、アリシェフの提起した根本的批判にまでは至っていないが、それにもかかわらず、従来のソヴェト史学の認識とは若干異なる新しい動きが現われたとみることができる。それゆえ、本稿は、通説的解釈を批判した種々の問題提起を念頭に置きながら、

併合過程と地方社会の変化を検討することを目的とする。

### 3 史料について

バシキーリアの併合研究に関する基本的史料は二種類である。一つは《шежере》と呼ばれるバシキール人社会に伝わる口承・伝承史料。いま一つは、ロシア帝国の年代記である。

第一に、《шежере》について。これはアラブ語起源で、文字通りには「樹木」を意味する語と「血縁関係」を意味する語とが結合し、さらに新しい意味として「系統樹」という内容を持つに至った。チュルク語諸語でも同様に「系統」の意味である。バシキール民族学の奉斗である P. Г. クゼーエフは次のように述べる。《шежере》は、「氏族や種族に特有な書かれざる歴史」であり、共同体構成員たちは「10代前から15代前までの自分の先祖の名前を記憶していなければならなかった<sup>29)</sup>」と。これは、19世紀の歴史家や郷土史家によって様々に訳されているが<sup>30)</sup>、クゼーエフはこれを「系統年代記 (генеалогическая летопись)」と名付けた<sup>31)</sup>。

《шежере》を一言で述べると次のようになろう。バルキール人の歴史に関して、彼ら自身の手になる重要な情報を持っている写本であると。しかも、バシキーリアにおける社会および歴史思想の成長の端緒について説明を与えてくれる独特な手書きの文献である<sup>32)</sup>。

バシキール人の《шежере》についての研究とその刊行は、クゼーエフに依る所が大きい<sup>33)</sup>。彼によって編纂された史料を基礎に研究したウスマーノフは、この史料がバシキーリア併合についての研究や他の一連の諸問題（17世紀までのバシキール人の社会体制、民族発生の起源に関する問題等）の研究にとって重要であるという<sup>34)</sup>。そこで、本稿では、クゼーエフによって編集された史料集<sup>35)</sup>が根本史料となる。とはいえ、これは口承・伝承史料という性格のため、利用上の制約があることは否定できない。

第二に、ロシア帝国の年代記について。他面、ロシア側の史料である年代記も、その記述についての信頼性という点では問題があり、それを記した修道僧たちを取り巻く種々の環境を十分に考慮しなければならない。その点に関して、Л. В. チェレプニンが、モスクワの年代記は、中央集権国家形成の初めから全ロシアの地の統一とモスクワの正当性という観念を宣伝した、と述べたのは重要である<sup>36)</sup>。さらに、「モスクワ第三ローマ論」も、ロシアにおける首府としてモスクワの役割を正当化するための論拠となっただけではなく、諸地域のモスクワ国家への併合を正当化する上で大きな理論的役割を担ったのも事実である<sup>37)</sup>。

また、年代記が作られた背景にあるのは、モスクワが宗主権を持つという観念やその権力の正当性・合法性を単に宣伝したり、表明するのを助けるというだけではなかった。それらと並んで、当時の人々には当然であると考えられていた歴史のなかに「神の意志」をみようとする観念も年代記作者を執筆へと駆りたてたであろう<sup>38)</sup>。しかも、執筆にあたって、彼らは直接的ないし間接的に国家の干渉のもとにおかれたのである。この明瞭な例はイヴァン四世とピョートル一世の時代にみられ、事実ツアーリ自ら歴史著述に積極的で

あった<sup>39)</sup>。このような傾向が、常に年代記にはあることを認識していなければならないであろう。

## I 併合前夜の情況

### 1 バシキーリアをめぐる16世紀の国際環境

バシキーリアをめぐる当時の国際環境は複雑であった。15世紀後半、モスクワ国家は国内的には中央集権化の形成期に入った。続くイヴァン雷帝治世の16世紀前半は、ロシア国内の一層の成長過程であると同時に、国際的威信の高揚期にもあたっていたが、まだ十分とはいえなかった。それでも、モスクワ国家は西方に気を配りながら、後の「東方政策」を展開するための基礎となる時期に入ったのである<sup>40)</sup>。

他方、東方のオスマン＝トルコ帝国は、16世紀前半において世界史上最も活力のある、また影響力のある国家として発展していた。特に、シュレイマン一世のトルコは、ヨーロッパにおける指導権確立を狙っていたハプスブルグ家の計画を挫折させ、これに対抗する勢力を助長し、さらにはヨーロッパに勢力均衡もたらしたのである。たとえば、ハンガリーにおけるトルコ支配を確立することになった1526年8月のモハッチの戦い以後の情況は、ヨーロッパ全域に対トルコとの関係が常に外交の重要課題になることを君主たちに認識させた<sup>41)</sup>。

オスマン＝トルコとロシアとの関係は、16世紀中葉までは通商関係が主であった。しかし、ロシアは、カザン汗国やクリミア汗国、アストラハン汗国、さらにはノガイ＝オルダの背後にいつもトルコの勢力を強く意識し、これらを撃つ時はトルコによる牽制を受けたし、また常にトルコの動向に注意を払わざるを得なかった<sup>42)</sup>。そして、トルコもきわめて宗教色の濃いイデオロギーである「ムスリム・ユルタの統一」という旗印を掲げながら、カザン汗国、クリミア汗国、アストラハン汗国、さらにはノガイ＝オルダから成る反ロシア包囲網の形成を考えていた<sup>43)</sup>。

しかし、クゼーエフが次のように述べるのはやや強引ではないだろうか。いわく、「ロシアと、1542年にすでにオスマン帝国と公式に主従関係に入っていたカザン汗国との闘争は、明らかに何よりも防衛の必要を呼びかけられたロシア国家への沿ヴォルガ併合の闘争であり、客観的には世界的＝歴史的な意義を有していた<sup>44)</sup>」と。

しかし、いずれにせよ、イヴァン四世のロシアは、対外的な関係を一層自国に有利な方へと変えていく努力を続けたのである。つまり、ロシアは草原と森林地帯を南下して国境線を広げ、1552年にはカマ川とヴォルガ川の接点にあるカザン汗国を、また1556年にはヴォルガ河口に近い中継貿易の中心であったアストラハン汗国を併合した。そして、モスクワ・カザン・アストラハンを結ぶ連絡路線の形成は、ロシアにとっては領土・交易の拡大を意味し、他方黒海北岸・北カフカース・ヴォルガおよび下流域のトルコ＝タタール系種族にとっては彼らがロシアの宗主権下に置かれることを意味したのである<sup>45)</sup>。しかし、我々はまず何よりも当時の地域住民の情況に目を向ける必要があるだろう。

## 2 バシキーリアの社会情況

本節では、バシキーリアの地誌、行政、社会体制、および民衆の情況について概観する。

まず第一に、地誌について。バシキール人の居住地域は、ヴォルガ川、カマ川、トボール川、およびヤイク川（現ウラル川）の上流と中流の間に挟まれたウラル山脈の両側に広がっていた。この地域は、特に有用鉱物に富み、森林や広々としたステップ、満々と水をたたえた川が流れる所である。ベラ川までの南ウラル西方の傾斜面は針葉および落葉樹林がおい茂り、そのなかに肥えた黒土を含むかなり広大なステップ地帯が点在している。また、バシキーリアの南の地方をこんもりと茂った森が覆っていた。ベラ川、ステルリ川、アシカダル川、テム川の渓谷は、から松の森林地帯が混じっている広々とした草原が伸びていた。バシキーリアの大部分、特にウラル以東（Зауралье）は、家畜用の広大な放牧地を含むはねがやのステップであった<sup>46)</sup>。

ここには次のような動物たちが生息している。森には熊、狼、山猫、穴熊、きつね、てん、りす、ビーバー、かわうそ、大鹿、湖にはかもやがちょうなど。そして、川特にヴォルガ川からはちょうぎめの類が獲れた<sup>47)</sup>。

このように、狩猟や漁撈にも従事していたバシキール人の基本的な生業は遊牧・牧畜であった。この経営には広い牧草地が必要になった。それというのも、夏だけではなく、冬にも家畜（馬・羊・雌牛・らくだ等）を養うための広大な土地が不可欠だからである。また、野性の蜜蜂の飼育、すなわち養蜂業も彼らの重要な生業となった。これも後のヤサーク税のなかに含まれていた<sup>48)</sup>。

しかし、基本的には遊牧・牧畜業を営んでいたバシキール人も、北西部、さらには17-18世紀を通じて南部および東部の住民のなかには、ロシア人入植者との接触によって農耕を知ったり、定着していった者も現われた。それでも定着し農耕を営んでいたのは、バシキーリア全体で見ると、わずかな地域にしかすぎず、16世紀後半までこの地方における大部分の住民は遊牧に従事していたのである<sup>49)</sup>。

第二に、行政について。この地方は、ロシア語で「道（дорога）」と呼ばれる四つの行政区分から成り立っていた。これは、キプチャク汗国時代の遺制といわれるものであるが、実際上は18世紀まで県と並存していた。

この語源については、A. ヤクボフスキー<sup>50)</sup>と V. B. ラードロフ<sup>51)</sup>の二説がある。しかし、両者とも《дорога》の語源となる《даруга》を本来行政職と考えていた点で一致している。おそらく、モンゴル諸国内では一定領域の代表がそのように呼ばれていたであろう<sup>52)</sup>。

キプチャク汗国時代、バシキーリアは幾つかの領域に分かれていて、《даруга》が長となっていた。この《даруга》たちが、①ヤサーク徴集に従事し、②支配下の族長たちや、同様に他の責任ある人々が賦税の徴集を滞りなく遂行することを監視する役割を担うのであった。このような任務を負った人々によって支配された地域が、後世ロシアの史料に《дорога》という名称で、比較的不変の行政単位として現われるのである。しかも、これは18世紀末（1798年）まで存在し続けることになった<sup>53)</sup>。

15-16世紀には、すでに《даруга》という語は行政職というよりはバシキーリア四地域

(カザン道、ノガイ道、シベリア道およびオサ道)の呼称となっていた<sup>54)</sup>。このことは、カザン汗サイプ＝ギレイが1523年に免税特権領主であるタルハン(тархан)たる権利を九人の領主たちに与えた有名な命令書(ярлык)によって支持されている。その史料から、当時、カザン汗国は《даруга》と呼ばれる行政区に分割されていたことが分かるのである<sup>55)</sup>。

第三に、社会体制について。15-16世紀前半のバシキール人社会は氏族制社会であり、時には氏族間で同盟を結ぶことさえあった。それについては、現在に至るまで、ブルズヤン、ウセルガン、キプサク、タミヤンおよびタンガウル諸族の伝承のなかに残っている。それによると、その社会の指導者は族長<sup>56)</sup>であり、16世紀には、彼らは「封建領主化」していったとされる<sup>57)</sup>。

この時代の重要な氏族制社会の特徴の一つに民会があげられるが、ソヴェト史学では、この民会の役割はあまり高く評価されており、ウスマーノフはその理由として次の二点をあげている。一つには、これらの民会はノガイの豪族(мурза)やカザンの汗たちが影響力を持ち得たし、その決定を拒否することもできたこと。いま一つには、遊牧民の有力者である族長、タルハン、長老(батырь)、およびイスラム教の聖職者が民会で大きな発言権を有したからである<sup>58)</sup>。しかしながら、民会の構造と機能をより具体的に考察することは、バシキール人社会を考える上で重要であろう。

また、土地は本来共同体の共有であった。つまり、それは氏族全体の所有とみなされていた。こうした体制は併合後も続き、むしろ併合はそのことに対して何ら影響を及ぼさなかったと考えられる。その際、重要なことは、ツァーリより「賜与された」土地の代償としてバシキール人はヤサーク支払いと軍役奉仕の義務を遂行したということである<sup>59)</sup>。

このように、バシキール人は氏族を中心とする共同体を核にして遊牧・牧畜等を営んでいたが、彼らにはバシキール人としての民族的アイデンティティの形成がみられなかったということは注目しなければならない<sup>60)</sup>。確かに、彼らは同一氏族としてのアイデンティティを示す様々な印を持っていた。ウラン(уран)と呼ばれる戦いの時にあげる叫び声、氏族に固有の紋章(тамг),先祖伝来のトーテム信仰の影響、氏族の鳥や木等もそうであった<sup>61)</sup>。それにもかかわらず、彼らはバシキール人としての民族的意識を持たず、またそれを形成するための契機も無かったのである。

第四に、バシキール人民衆の状況について。バシキール人社会の基本的住民である共同体構成員は、形式的には土地や他の収益地を等しく所有していたが、実際には土地は族長やタルハンおよび豪族たちの手に帰っていた。また、他の様々な税や賦役に関しても、彼らバシキール人上層はそれらから解放されていたが、民衆にとっては堪え難い重圧となっていた。上層に免税特権等を与えるという汗の命令書は、我々に民衆が担わねばならなかった負担がいかに重かったかを教えてくれる<sup>62)</sup>。その支払いは、「きつね、ビーバー、てん」などで行い、「そのため、彼らはすっかり消耗しきり、貧窮に陥った<sup>63)</sup>」という。

さらに、彼らの負担はそれに尽きるものではなかった。一層消耗的な義務は、彼らに課された軍役奉仕である。彼らは、ノガイ＝オルダ、カザン汗国、シベリア汗国の代々の汗や豪族たちによって度々組織・遂行された軍事遠征や襲撃への参加が求められた。その際、

彼らには遊牧民としての特長を生かして騎馬隊を編成することが義務づけられていた<sup>64)</sup>。

そして、諸汗国によるバシキーリアの細分化、およびノガイ人領主やシベリアの諸汗たちの間断なく続く来襲が、当地域の社会を疲弊させ、また全民衆の連帯形成の統一を阻んだことも事実である。さらに、南部や南東部のバシキール人の一部は、ノガイ人領主や自らの上層部のアジテーションや強制によって南方（カフカースのステップやクバンのステップ）に移住させられさせられた<sup>65)</sup>。

また、バシキール人氏族間の内訌も見逃すことはできない。それは社会に大きな影響を及ぼしただけでなく、彼ら自身が多数捕虜として中央アジアやヴォルガの諸市場で奴隷（рабство）として売られることになったのである<sup>66)</sup>。

このように、バシキール人民衆は、当時共同体上層と諸汗国による二重の抑圧を被っていたといえるであろう。こうした状況は実に16世紀中葉まで続くのである<sup>67)</sup>。この関係に変化がみられるのがカザン汗国の崩壊以後であった。

### 3 ロシアとカザン汗国

前節で述べたバシキール人社会を大きく変えることになったのが、1552年のカザン汗国の崩壊とそれに続く一連の動きである<sup>68)</sup>。しかし、すでに本章第1節で論じたように、16世紀のロシアをめぐる国際環境はきわめて複雑であり、そのなかでロシアにとって何よりも早急に解決しなければならない問題は、カザン汗国との関係であった。このロシアとカザン汗国との関係は、周知のように戦争にまで発展するが、それは16世紀第2四半期の東ヨーロッパのいわば国際関係のなかで、最も重要な問題の一つともなっていた<sup>69)</sup>。しかも、この問題はすでに述べたように、トルコの影響を無視して考えることが不可能なのである。

実際、16世紀中葉のカザン汗国は、トルコやクリミア汗国を背景にした、いわばロシアにとって危険な「火薬庫」であった<sup>70)</sup>。領土拡大と東部国境の保全を計るロシアにとって、この「火薬庫」は大きな障害になっていた。ロシアがそのように認識していた理由をここでは三つあげることができる。まず第一に、カザン汗国が存在するために、ロシアは西方に対して安心して積極策を採れなかったこと。第二に、東方と南方からのロシアへの攻撃、それによる都市や村落の荒廃と多数のロシア人捕虜の連行、およびロシア人やヴォルガ沿岸・ウラル地方の諸民族の貧困化をもたらしたこと。事実、1551年には、カザンで十万人以上のロシア人捕虜が出ていた<sup>71)</sup>。第三に、カザン汗国がヴォルガの商業路を握っていたため、ロシア人は東方との往来に支障をきたした<sup>72)</sup>、の以上三点である。

しかし、ここで次のことも指摘しておかなければならない。すなわち、16世紀のモスクワ国家はせいぜいモスクワを中心とする一勢力にしか過ぎなかったということ。当時はむしろ、多くの民族諸国家や勢力がモスクワ国家と並存し、また競合し合っているのが常態であった。後の17・18世紀にみられるように、東欧における強大な勢力として統一されたロシア帝国がすでに歴史的に準備されていた、とは必ずしも言えないということである。特に、最後の点は、ロシア史をひとりロシア民族による国家形成史として位置付けようとする歴史家によるその論理のための理由付けではなかったろうか<sup>73)</sup>。さらに、この点は、

併合をその民族の「自由意志」によるものとみなす考え方にも通じているであろう。

#### 4 カザン汗国崩壊後の動向

カザン汗国とロシア国家の戦いは、イヴァン四世の1552年カザンの征服で終焉した。しかし、この戦争は局面によってかなり複雑に推移していたのは周知の通りである。本稿では、カザン戦争そのものについて論ずることはしないが、その経過のなかで、汗国の支配下にあった中央沿ヴォルガ地帯の種々の民族が状況に応じて度々態度を変えたこと、そして最終的にはカザン側ではなくロシア側についたことなどは特筆すべき点である。ここに、カザンとモスクワ双方の権謀術数あるいは諸民族の模様眺めの駆け引きが働いていたのはいうまでもない。そして、このカザン征服以後、ロシアによる諸民族併合への動きが始まるのである<sup>74)</sup>。

しかし、カザン汗国崩壊後すぐに当該地域が完全に平静になったわけではなかった。1553年3月10日、アレクサンドル・ボリソヴィチ・ゴルバティー公はカザンからモスクワに宛てて次のように報告している。「草原地方（Луговой）のカザン人たちは裏切った。ヤサークを納めず、草原地方でヤサーク徴集人ミシュリ・リホレフとイヴァン・スクラートフを殺害し、アールスコエ〔原野〕にやって来て、全員が一体となり、逆茂木のある高い山に陣取った<sup>75)</sup>」と。叛徒たちは必死に戦いながら、強力な拠点をも創設した。年代記は次のように続ける。「アールスコエ〔原野〕の人々も、川沿いや草原地帯の人々もメーシャに砦を建設した。そこで、彼らは身を隠すために土を盛り上げて壁を作ったのである<sup>76)</sup>。」

こうした叛乱鎮圧のため、イヴァン四世は強力な軍隊をカザン地方に派遣しなければならなかった<sup>77)</sup>。この叛乱は1553年秋には一層広範な地域にまで波及し、政府軍もさらに多大の軍勢を投入しなければならない程であった。年代記は叛乱の結末について次のように語っている。ロシア軍は「メーシャの砦を焼き、そこで若干の人々を捕え、殺害した。他の人々は走り去ってしまったのである。その近郊の村落もことごとく焼き払い、人々を追い出し、砦をすっかり破壊したのである<sup>78)</sup>。」

叛乱は1555と56年にも発生した。特に、56年には大きな動きが「草原地方」と「山側の地方」とで、つまりチェレミス人とチュヴァシ人住民の間であった。しかし、叛乱内部でも鋭い対立が発生し、それが叛乱軍自体の弱体化につながっていった。かくして、1557年春に叛乱は鎮圧され、以前のカザン汗国支配下の民衆蜂起は終結したのである<sup>79)</sup>。

ここで問題となるのは、バシキール人と叛乱との関係である。史料的には、彼らの叛乱参加を示す直接の報告はない。ウスマーノフは、彼らは叛乱軍に参加していたかも知れないが、ロシア人と闘う何らの根拠も動機もなく、またロシアの軍隊もバシキーリアに侵入することはなかった、という。なぜなら、彼らにはそのような侵入を行う理由がなかったからであると断言する<sup>80)</sup>。確かに、A. M. クルプスキー公の報告によれば、ロシアの前哨部隊は反対者を追跡して「バシキール民族」の所まで、すなわちバシキーリアの北西の境界となるカマ川左岸までやって来たが、ロシア軍はカマ川を渡らず、バシキーリアの境界沿いに移動したという<sup>81)</sup>

バシキール人自身の具体的行動について史料がほとんどないため、我々は明確な答えを導き出すことはできない。しかし、後の1572年ストローガノフ家がバシキール領内に定住地を建設することに反対して立ちあがった叛徒のなかには、チェレミス人やオスチャーク人たちと並んで、バシキール人の名がみえるのも事実でなのである<sup>82)</sup>。

ウスマーノフは、カザン汗国とアストラハン汗国の崩壊、およびその併合は、ノガイ＝オルダの内訌・弱体それに続くモスクワへの臣従的依存 (вассальная зависимость) の傾向を早めたとしている。そして、ヴォルガ流域およびウラル地方の多くの諸民族についても事態は同様であり、ロシアのバシキール併合にとって現実的情况を生み出したとしている<sup>83)</sup>。この点を含めて、次に併合そのものの過程を具体的に検討しよう。

## Ⅱ 併合過程

### 1 併合の経緯

すでに述べたように、16世紀モスクワ国家の当地方に対する一層の軍事的援助や経済的援助、カザン汗国の崩壊、それに続く旧カザン汗国領内へのロシア軍の行動にもかかわらず、状況は混沌としていた。たとえば、ノガイの汗や豪族たち、およびその影響下にある民衆は、四部族を除いてはまだその地域から立ち去ってはいなかった<sup>84)</sup>。また、他の諸勢力も完全には一掃できなかったのである<sup>85)</sup>。では、バシキールは一体どのような経緯でロシア国家に併合されていったのであろうか。

併合の様子については、《шежере》のなかでかなり詳細に語られている。ここでは、まずバシキール人自身の行動について検討する。

カザン占領後、イヴァン四世政府の関心は、もっぱら西方に向けられることになった<sup>86)</sup>。しかし、その目的は他民族の併合を貫徹すること（しかも、できる限り平和裡に行うこと）であった。その際、イヴァン四世が「あらゆる地方 (улусы) に住む人々に向けて、ヤサーク支払いの代償として、彼らに特許状 (жалованные грамоты) を送った。このなかで、彼らバシキール人がヤサークを支払う代わりに、ロシアの君主は、以前のカザン汗がそうしたように、彼らを庇護すると明言している<sup>87)</sup>。

このようなツァーリの特許状は、実際バシキール人の受け入れるところとなった。たとえば、バシキール人のほぼ中央部に位置していたユルマティン族の《шежере》は、このことについて次のように語っている。「ロシア人はカザンの町も占領した。それから後、白き族長<sup>88)</sup>が王 (бадшах) になった。959年<sup>89)</sup>白き族長は様々な地方に次のような特許状を持たせた使者たちを派遣した。いわく、『たとえ、何びとも逃亡することなくとも、各人は自らの宗教に従い<sup>90)</sup>、また自分の習慣を守るであろう』と<sup>91)</sup>。』また、土地についても境界を明記して安堵されたが、それと同時にヤサークの額も決められた。しかし、その際、上層の人々には様々な官位や称号が与えられたのである<sup>92)</sup>。

ユルマティン族はバシキール人の中央部に住んでいたから、西部のバシキール人にも同様の内容の特許状がすでに知られていたと考えても無理ではなかろう<sup>93)</sup>。そしてまた、南部と東部のブルズヤン、キプサク、ウセルガンおよびタミヤン族の《шежере》でも同

様の内容が述べられている<sup>94)</sup>。ユルマティン族と同様、彼らもロシア国家に対して忠誠を誓うことになる。そのために、彼らはカザンに人質（аманаты）を差出すことを要求され、その後モスクワのツァーリ＝イヴァン四世に使節を派遣することになった。それは、バシキール人のカザン来訪後一年経ってからのことである。また、《шежере》によると、大半の使節は1557年にモスクワにやって来て、彼らは献上品としての毛皮の他に、最初のヤサークを納めたという<sup>95)</sup>。

《шежере》のなかで、バシキール人は語っている。モスクワにおいて、彼らはツァーリの特許状を受け、ツァーリの「臣民」となり、彼らが遊牧していた土地の世襲所有権を「賜与された」と。クゼーエフによると、1557年のモスクワへのバシキール人使節の派遣ならびに彼らに対するツァーリによる特許状付与は、ロシア国家のバシキーリア併合の最終段階であるという<sup>96)</sup>。

実際、ニコン年代記も、1557年春、ツァーリの軍政官の一人 П. И. シュイスキー公がモスクワに次のように報告したことを伝えている。カザン汗国の住民は最終的にロシア国家の権力を受け入れた。その従順さの「果てに」カザンにいる彼の所に「……バシキール人たちはやって来て懇願し、ヤサークを支払った<sup>97)</sup>」と。

その後、北東およびウラル以東のバシキール人たちは16世紀末になってロシアの臣民となった。その時にはすでに、シベリア汗国の命運も尽きていた<sup>98)</sup>。ここに、ロシア国家へのバシキーリア併合は完了したとされるのである<sup>99)</sup>。

## 2 併合受容についての問題点

カザン汗国崩壊期にロシア軍とバシキール人との武力衝突がなかったこと、また前節まで述べてきたことから、ソヴィエト史学では、併合はイヴァン四世によるバシキーリアの「征服」の結果とする根拠はないとする。むしろ、それはバシキール人側の「自発的」行為ないし「自由意志」によるものとみなしている。しかし、果たしてそのように断定することができるであろうか。

事実、地方の歴史家のなかには、バシキール人がイヴァン四世の特許状に呼応して自分の意志でロシア国家に臣従した、ということに疑問を抱く人もいる。たとえば、ウファ県の貴族で郷土史家でもあった В. А. ノヴィコーフがそうである。彼は、はたしてバシキール人たちが臣従を示す請願書を送ったかどうか不明だとしている。彼がこれ以上に疑っているのは、バシキール人の臣従には何らかの圧力があったのではないか、ということである。つまり、彼らはバシキーリアへのロシア軍の侵入に対する危惧の念からこれを受け入れたのではないか、とみているのである<sup>100)</sup>。

しかし、ウスマーノフはこうしたノヴィコーフの疑問を批判しながら次のように反論する。つまり、ノヴィコーフは《шежере》の多くのヴァリエントを知らなかった。そして、事実、バシキール人のあいだには併合受け入れの動きが存在していたという。彼はこれらのことを次の三点から説明した。まず第一点。バシキール人たちは、ロシア人ツァーリの臣下になることを望む請願書を持っていた。それは、ロシアの使節がやって来て、彼らバシキール人が特許状の内容について知った後のことであったという。第二点。カザンには

ロシア国家への臣従受け入れの体制がすでに出来あがっていたこと。すなわち、ロシア政府はカザン総督を長とし、またバシキール人からは族長を代表とする使節団が形成されていたのである<sup>101)</sup>。第三点。時代は下るが、1709年の史料は次のように述べている。いわく、バシキール人は以前にカザン汗に対して困窮のなかで仕え、またヤサークを何年にもわたって納め続けた。しかし、カザン汗国崩壊後、イヴァン四世である「大君 (великий государь) に対して、祖父も父も絶対的に敬意を表しつつ、自らの意志でやって来て服従した<sup>102)</sup>」と。以上がウスマーノフの論点である<sup>103)</sup>。

併合に関する研究史上の論点については、すでに序論で述べたので繰り返しを避けるが、ウスマーノフの指摘するように、併合受け入れの態勢が事実として出来ていたにせよ、バシキール人とロシア政府はそれぞれ自らの利益を併合のなかにみていたのではなかろうか。そうであったからこそ、少なくとも表面上（あるいは事実として）は平和裡に併合が進展していたかのようにみえるのである。それでは、バシキール人とロシア政府それぞれがみていた利益、そして双方にとっての併合の意味とは何か。これが次の問題となろう。

### 3 併合受容の「条件」

当然のことながら、併合に対する姿勢はロシア政府とバシキール人とでは違っていた。何よりも、ロシア政府にとってはその国家的利益の追求が第一であろうし、他方バシキール人は自由と従来の諸権利の擁護を期待しながら、「バシキールの土地が豊かな分だけ」毛皮や蜂蜜あるいは金納によるヤサーク支払いと軍役奉仕の義務を負った<sup>104)</sup>。この点を具体的に検討しよう。

まず第一に、ロシア政府にとっての併合の「条件」について。カザン占領後のウラルや沿ヴォルガ地域におけるロシアの対外政策は、当地方の諸民族の内部状況を考慮して行われた。一方、諸民族の間では、カザン占領の影響下、すでにロシアへの接近を計ろうとする動きも強まっていた。このことについてもロシア政府はその情報を手に入れており、ロシアにシンパシーを持つ諸民族を味方に付けようとあらゆる努力を講じたのは言うまでもない。その点、カザン戦争の時とまったく同様であった。この目的のため、すでに述べたように、至る所にツァーリの特許状が送付されたが、それは当該地方の住民にロシアへの併合あるいは合体を呼びかけるものであった。その際、政府は彼らに「平和と安全 (мир и безопасность)」を約束したのである。

ツァーリの特許状はいう。「恐怖心を抱かず、また怯えることなく余のもとに来たれ。余は過去のことを忘れるであろう。なぜなら悪事は罰せられたからである。そして、余に汝らがカザンの代々の汗たちに支払っていたものを支払うように<sup>105)</sup>」と。

しかし、ロシア政府はもっと明確な国家的利益の追求を考えていた。政府は、カザン汗国やアストラハン汗国に対する戦いにあたって、当地方でツァーリの軍隊に自ら進んで参加・臣従する民衆を必要としていた。また、実際にそうした人々、しかも戦闘に長けた騎馬隊を獲得したのだから、ある程度の譲歩として、彼らに一定の利益を与えても構わないと考えていた<sup>106)</sup>。

この点について、バシキール人の伝承は次のように語っている。すなわち、カザン崩壊

後、バシキール人は、「ツァーリ＝イヴァン・ヴァシーリエヴィチの善良さについて色々耳にしていたので、彼らは自分たちの族長を派遣して臣民にしてくれるように頼んだ。ツァーリは慈悲深く使節たちをもてなし、彼らに称号を与え、色のついたカフタンを賜与した。また、バシキール人たちには、軽い毛皮と蜂蜜によってヤサークを納めるという条件で、彼らが住む土地を所有する権利を与えたのである<sup>107)</sup>。』

こうした国家的利益の追求と並んで、政府の利益提供がきわめて階級的立場からなされたということも見逃すわけにはいかない。つまり、純然たる利益を受けたのはバシキール人民衆ではなくて何よりも上層であり、そのことによって彼ら上層は自らの経済的そして権力的基盤を従来にもまして強固なものとしていった。先にあげた伝承中に表現されているイヴァン四世に対して抱くバシキール人の好意も、この観点から考えなくてはならないであろう。

次いで第二に、バシキール人にとっての併合受容の「条件」とは何であったのだろうか。彼らは、この併合に、何よりも自由と諸権利の保護をみていた。つまり、彼らは自らの生命・土地に対する世襲所有権の保障および信仰の自由などを念頭に置いていた。確かに、「イヴァン雷帝は、バシキール人を自らのいと高き手のものにおかれた。彼らに対し、彼らとその土地を隣接の民衆の抑圧と占領から守り、かつバシキール人によるイスラム教伝導の完全な自由を与えた<sup>108)</sup>」という。

しかし、より重要なのは、イヴァン四世がバシキール人に世襲の土地所有権の確認を与えているということである。その特許状では、彼らが従来通りに土地の完全な所有者のままであり、政府は常に彼らの土地に対する権利を守り、その世襲領地内での勝手な土地占拠および外部から世襲領地への侵入に対して彼らを保護するという条件がうたわれていた<sup>109)</sup>。また、彼らには、以前タタール人やノガイ人の領主たちによって占拠された土地も返還されたのである<sup>110)</sup>。

こうした土地世襲所有権の保障を内容とする特許状を受けたことから、バシキール人の間にはイヴァン四世に対する人気が高まることになった。彼らは、イヴァン四世を「善良な」あるいは「寛大な」ツァーリと呼んだのである。ツァーリに対するこのような彼らの抱く好意も、実はロシアの国家的利益の追求という観点からみなくてはならないということはすでに述べた通りである。しかし、より注目しなければならないのは、土地世襲所有権の確保の代わりに、バシキール人はロシア国家に対するヤサーク納入と軍役奉仕の義務を通して<sup>111)</sup>、ロシア国家とバシキール人との関係が支配—従属関係へと発展していったということである。この点の検討が次の課題となろう。

### Ⅲ 併合後の諸変化

#### 1 ロシア国家とバシキール人社会——ヤサークと軍役

第一に、ヤサークについて。これに関しては、従来から多くの研究がある。たとえば、研究史を踏まえた上で、特に C. B. バフルーシンの研究に依拠しながら、B. Д. ドミトリエフはその論文で中央沿ヴォルガ地帯のヤサークについて考察している。彼によると、ヤ

サークはキプチャク汗国時代からすでに存在しており、チュヴァシ人、チェレミス人、ウドムルト人、モルドヴァ人、および若干のタタール人が支払っていたという<sup>112)</sup>。

一方、併合以前のバシキール人たちは、共同体毎にその土地や牧場の大きさに応じてヤサークを支配者である汗あるいはその代官たちに納めていた。その際、ヤサークの直接の納入者は共同体構成員たる各家族であり、それをバシキール人ないしはタタール人領主が徴集し、その後土地の最高所有者たる汗のもとに届けたのである。史料は、ヤサーク等の税が堪え難い程重かったこと、そのためバシキール人が度々立ちあがったことを伝えている<sup>113)</sup>。

しかし、ここで重要なことは、ロシア政府およびバシキール人それぞれにとってのヤサークの意味である。それは、バシキール人にとってカザン汗国に取って代わった新たな上部権力であるロシア国家に対する忠誠の印であると同時に、彼らの土地に対する世襲所有権のシンボルともなっていた<sup>114)</sup>。他方、イヴァン四世政府にとっては、国庫の補充、贅沢品に対する渴望の充足ということだけではなく、地方支配の一つの手段でもあった。以上の点を具体的に考察しよう。

まず、バシキール人にとってのヤサークの意味について。ロシアのツァーリから土地に関する特許状を受けた後、土地はバシキール人諸氏族のものとなったが、その特許状のなかには、「領域の境とヤサークの額」とが明記されていた。たとえば、イヴァン四世からユルマティン族に与えられた特許状によると、彼らは以前ノガイ人によって占拠されていたアシカダル川沿いの広大な土地を領有するようになった。そのことに對し、彼らは年間百匹分のてんの毛皮をツァーリに納めたのである<sup>115)</sup>。そして、ほとんどすべてのバシキール人村落には、同様の伝承が現在でも残されている<sup>116)</sup>。

政府は、各氏族に土地を「下賜する」際には、当時すでに存在していた氏族毎の境界を守り、またバシキール人の方でも土地に対する特許状の受領を希望する場合、彼らはその土地を「彼らの祖先や祖父たちが所有していたこと」を証明しなければならなかった。そして、併合当初、ロシア政府は土地の法的所有者を人々の集団（коллектив людей）たる氏族共同体とみなし、それゆえ16世紀後半から17世紀初頭を通じて、ほとんどすべてのバシキール人の土地は特許状によって氏族の所有となった<sup>117)</sup>。このようにして、「下賜された」土地の代わりに、政府はバシキール人に対し、受け取った土地の大きさに応じてヤサークを要求し、それが各家族に均等に課されることになったのである。

こうした状況下で、バシキール人は土地に対する世襲所有権とヤサークとの関係について独特な観念を抱くようになった。つまり、彼らはこの所有権の依り所を「ヤサーク台帳」への登録とみなし、ヤサーク納入の義務を負う者は台帳に登録されているが、土地に対する自らの権利もこの同じ台帳に載っていると考えたのである。たとえば、後年1694年、オサ、カザン、シベリアおよびノガイの各道のバシキール人はイヴァン五世とピョートル一世両帝に対して興味深い請願をしている。そのなかで、彼らは、土地世襲所有権を持つが、「ヤサーク台帳」に登録されていない者はその権利を持たないという。バシキール人は、そのことを根拠に、外からの流入者が彼らの土地を勝手に占有していることに對し、自らの土地所有権を保護してくれるようにと請願したのである<sup>118)</sup>。同様な例を、1728年5月

のカザン道グレイスカヤ郷のバシキール人の証言等にもみることができる<sup>119)</sup>。

しかし、これらの証言は、逆に、彼らの土地に対する世襲所有権が徐々に侵害されていたことを示している<sup>120)</sup>。そして、バシキーリア内の彼らの独占的土地所有は、法的には1736年2月11日の布告によって完全に消滅し、ロシア人や他の流入者も土地を所有する権利が法的に確認されたのである<sup>121)</sup>。しかし、それ以後も彼らバシキール人は土地に対する世襲所有権を主張し続けた。その例を、我々は、1767年新法典編纂委員会の代表者に対する旧ノガイ人の支配下にあった地方のバシキール人の発言<sup>122)</sup>、さらには19世紀に入ってから史料にもみることができる<sup>123)</sup>。

他面、ロシア政府は、このヤサーク制度を地方支配の道具の一つとして利用するに至ったのである。つまり、政府は地方住民の上層と他の民衆とを峻別して支配する方法をとった。実際の納入は民衆が担ったが、上層部にはヤサーク納入からの解放という特権が与えられた。その際、彼ら上層の人々は政府に人質を差し出すことを要求されたのである。こうしたことを通して、ロシア政府は地方の上層が民衆と遊離した存在になることを助長し、それを利用して政府にとって脅威とならないように、バシキール人全体の連帯形成をも阻むという地方支配の基本政策を貫徹しようとした<sup>124)</sup>。また、土地に関しても、共同体のものとして、公的にはバシキール人上層部に土地管理権を認めることはなかったが、実際には政府は彼らをそうした権利等の占有へと向かわせた。そのことも、先に述べたロシア政府の地方支配の政策に沿ったものとみなすことができよう<sup>125)</sup>。

第二に、軍役についてである。これも、ヤサークの制度と同様、バシキール人社会をロシア国家に従属させる重要な要因となった。この義務は、バシキール人に騎馬隊を編成させて、ロシアの南東国境の防衛に常時あたらせるという以外に、対外遠征への参加をも要求したのである。16世紀後半の対リヴォニア戦争や対クリミア戦争、17世紀初頭の対ポーランド＝スウェーデン戦争、さらには17・18世紀の種々の戦役に彼らは参戦することを余儀なくされた<sup>126)</sup>。彼らの戦功に対して与えられる賞与や官位は、やはりバシキール人上層に厚かったのである。

一方、ロシア政府は、上記のような実際の軍役だけではなく、制度としての軍隊組織（そして軍役奉仕）を通してバシキール人を監視するという意味をもこの義務の中にみていたのであろう。

しかし、16世紀後半の政府にとって緊急の課題となったのは、一層徹底したヤサークの徴集、地方行政の確実な執行、およびシベリア汗国に対する軍事行動のための拠点をバシキーリア内に建設することであった<sup>127)</sup>。その当時まで、カザン汗国崩壊以来約30年間にわたり、拠点となったのはカザンであった。それに代わって、1586年バシキーリアの中央に要塞＝都市としてウファが建設されたのである<sup>128)</sup>。ここで注目すべきは、ウファ建設と踵を接するかのよう、当地方へのロシア国家による植民が開始され、さらにウファはバシキーリアの境界を越えて東方地域にまでロシアが勢力を拡大する拠点となった、ということである<sup>129)</sup>。

以上のように、ヤサークと軍役はともに、バシキール人のロシア国家への従属を確固たるものにしていったのである。そして、バシキール人社会内部の諸問題に対しても、併合

以後ロシア国家は積極的に関与するようになった。

## 2 バシキール人社会の変化

併合を受け入れてから、バシキール人社会には様々な変化がみられるようになった。特に注目すべきは、人間関係の変化が生じたこと、つまり従来にもまして社会内部に一層明確な支配—被支配の関係が形成されたということである。しかも、ロシア政府がそれを助長していたのである。ここでは、それを併合以前にすでに存在していた奴隷制と搾取の情況、そして様々な抑圧に対する反抗について概観することにより検討しよう。

まず第一に、奴隷制について。南ウラルおよび沿ウラルの諸種族は中央アジアの奴隷制を基盤とする諸文明と人種的にも経済的にも接触を持っており、バシキール人はそうした奴隷制社会の中心とステップ地帯の遊牧民との橋渡しの存在であった。戦闘に長けていたバシキール人のもとで、奴隷の主な供給源は戦争捕虜（ясырь）である。

歴史文献によれば、バシキール人たちは中央アジアの諸市場で彼らを買ったり、奴隷にする目的で北方民族のハザール族やスラヴ人さえも襲撃した<sup>130)</sup>。10世紀初め、アッバース朝カリフのムクタディルの使節としてヴォルガ河畔のブルガール族の王のもとに使いしたイブン・ファドラーンは、そうしたことがすでに当時存在していたことを伝えている。また、碩学 B. B. パールトリドは、バシキール人のもとで戦争捕虜の売買はかなり広範に普及していた現象であるという。そして、時には自分たちと同種族の者さえも奴隷として売ってしまうこともあった。14世紀のアラブの作家エル・オマルは、バシキール人やブルガール人たちは自分の子供さえも売っていたと記している<sup>131)</sup>。また、奴隷化は債務関係によって生ずる場合もあった<sup>132)</sup>。

併合以降になっても、このような情況は止まず、さらには永久および期限付きホローブ制や折半小作的な諸関係さえもバシキール人社会のなかに徐々に生じる場合さえあった。しかし、ツァーリ政府にとっては、ヤサーク住民の数的減少につながる上述の関係の発展は不利益ともなり、そのため政府はそうした関係の進展に歯止めをかけることさえしたのである<sup>133)</sup>。クゼーエフは、バシキール人の奴隷制はその社会にとって基本的な生産力とはならなかったとしているが<sup>134)</sup>、事實は政府が関心を示す程大きな問題になっていた。

また、上記の奴隷制と関連して、ロシア国家に対する忠誠の印としてバシキール人が差し出す義務を負った人質の制度も注目しなければならない。管見の限りでは史料は少ないが、18世紀に至るまでバシキール人には大きな負担になっていたのである<sup>135)</sup>。

第二に、搾取の情況について。ソヴェト史学の通説的解釈では、すでに述べたように（第Ⅰ章1・2節）、併合以後のバシキール人の情況はそれ以前と較べて改善されたという。しかし、バシキール人上層と新たにその地域に派遣されてきたロシア人軍政官たちは、バシキール人に対し従来にもまして重い税等を課し、彼らに苦しい生活を強いたことも事實である。それは、政府に差し出すヤサークや彼らの担う賦役とは別に、ロシア人の役人やバシキール人上層が私的な目的で無理にバシキール人民衆から取り立てる賦税が増大したからであった。

この点に関して、ノヴィコフの見解は特徴的である。「もち論、そうした遠隔地域を

支配する人々は、ヤサーク徴集に際して、自ら若干の圧力を加えたり、また現物納義務のなかに政府によって要求されていない多くのものを付加したのである<sup>136)</sup>』と。実際、史料にはこのようなバシキール人上層とロシア人の役人双方による搾取の例が少なからずみられる。特に、地方役人の側からの圧迫や汚職ははなはだしかった。軍政官、ヤサーク徴集人、および他の役人は、その役職を利用して私腹を肥やした。地方住民の財産は奪われ、ヤサーク納入者たちの妻や子供は奴隷とされたりもしたのである。あるバシキール人は、1663年の史料のなかで、次のように述べている。「イヴァン・パブロフとイヴァン・クラコフとは、彼ら〔バシキール人〕のところから良い馬と側対歩のできる馬、ビーバーの毛皮、そしてあらゆる種類の家財道具を奪い、自分のものとした。そして、彼らの妻や子供も強奪した。さらに、彼らの衣服もはぎ取り、その妻たちを一枚の下着だけのままにしたのである<sup>137)</sup>』と。

第三に、種々の抑圧に対する反抗について。併合以後、特に17世紀以後、バシキール人は、不法なヤサーク徴集や搾取に対して度々立ち上がった。しかし、蜂起した多くのバシキール人は、鎮圧時にはバシキール人の上層やロシア人の官憲による残忍さ、専横、さらには復讐にさらされた。それゆえ、彼らはカザフのステップへと逃亡を計ろうとしたが、多くは逮捕・殺害されたり、奴隷として売られたりしたのである。こうした状況について述べた史料は<sup>138)</sup>、上層の人々などの篡奪に対する直接・間接的指摘が主たる内容となっている。

また、蜂起を考える場合、バシキール人はそれをどのようにみていたかを検討することも、なぜ彼らが立ち上がったのかを考察する上で重要である。もちろん、バシキール人は様々な抑圧等に反対すべく蜂起したのであるが、以下に述べるように、特徴的な彼ら自身の蜂起・叛乱観もまた立ち上がる上で大きな役割を果たしたのであろう。

ロシア人にとって、一たび忠誠を誓った者が蜂起を起こすことは反逆であるが、しかしバシキール人にとって、蜂起は譲ることのできない権利であった。確かに、16世紀中葉には、彼らはロシアの宗主権を受け入れた。しかし、彼らは、自らは自由であって、併合も自発的に受け入れたのであり、受け入れたと同様に、捨て去ることもできると考えていた<sup>139)</sup>。それがこの地方の遊牧民の間における習慣的観念であった。とはいえ、ロシア人は事態を違った角度からみていたのは言うまでもない。つまり、彼らはロシア政府を支持する人々を「忠実なバシキール人」と呼び、他方反対する人々を「反逆者」と規定したのである。しかし、「忠実なバシキール人」は、自民族によって、今度は逆に裏切り者とみなされもした<sup>140)</sup>。

バシキール人の蜂起は、外部からの侵入に対する抵抗という色合いが濃い。併合後、史料にあらわれた蜂起の最初のもは、すでに述べたように（第Ⅰ章4節）、ストローガノフ家に対するものであった。1572年バシキール人は、他のチェレミス人、ウドムルト人、オスチャク人およびノガイ人等とともに、この有名な企業家によるカマ川沿岸での定住地建設に対し立ち上がった<sup>141)</sup>。1581年には、再び同地にストローガノフ家によって建てられた町が、バシキール人を含めた一団によって攻撃され焼却された。また、ノガイ道のバシキール人とノガイ人たちは、1586年ウファとベーラヤ川の合流点近くに町を建てるこ

とに反対した。そして、1589年のロシア人定住者に対する攻撃はことに激しいものであった<sup>142)</sup>。

それ以後、「動乱時代」を経て17世紀に入っても、バシキール人による流入者に対する闘いは衰えをみせないのである。なぜなら、彼らの外からの侵入に反対するという行動は、当地方の他の民族であるタタール人、チュヴァシ人、チェレミス人、ウドムルト人、カルムイク人らの共感と支援を受け、時には共に立ち上がることさえあったからである<sup>143)</sup>。しかし、徐々に当地方に対するロシアの政策にも変化がみられるようになった。

### 3 17世紀のバシキーリア行政と叛乱

当地方の諸民族に対して、17世紀のロシア政府は新たな政策の転換を迫られることになった。カルムイク人が、アルタイ山脈からヴォルガ川にかけて辺境に沿って住んでいたロシア人の活動を妨害したのである。また、多くのノガイ人はカルムイク人に吸収され、他の一部のノガイ人は北方に逃がれた。そして、残りはそのまま南方に残留し続けたのである。カルムイク人とノガイ人とが結合して、両者はロシア人の辺境諸都市を攻撃し、そのため政府はカザンの南東に新しい防衛線を築く必要に迫られた。それがカマ川以東に築かれたトランス・カマ線 (Закамская линия) である。この規模としては取るに足らない防衛線が、ウファの建設と並んで、ロシア国家によるバシキーリア地方に対する植民のより強固な礎石となった<sup>144)</sup>。

1652-57年の間に、このトランス・カマ線は新しい防衛線に取って代わられた。それは、ヴォルガ川に発し、バシキーリア内のベーラヤ川河口にほとんど達するものであった。その主な要塞は、ベールイ・ヤール、エルクリンスク、ティインスク、ゼリヤルスク、ノヴォシェスミンスク、キチュエフスク、ザインスクおよびメンゼリンスクである<sup>145)</sup>。

この地方に足場を築き、さらに勢力を拡大しようとするロシア政府の動きと、それに対する地方住民のあつれきは、1662-1664年の大辺境戦争となって現れる。詳細に検討するならば、その原因は三つある。第一には、ポーランド＝クリミアとの戦争遂行による国内経済の破綻、そしてそれに続く国庫増収を計るべくあらゆる地方の住民に対して課された貢租の増大であった<sup>146)</sup>。第二には、そして特にバシキーリア内の直接的原因となったのが、農奴制を逃れてやって来た多数のロシア人農民および中央ヴォルガや下カマ流域地帯からの非ロシア人の流入であった。彼らはバシキール人の放牧用地を占拠したのである。こうした状況に対して、先住民の間から不平が生じていた。1694年の史料ではあるが、そのことを明瞭に示しているのであげておこう。その中では、カザン官署 (Приказ Казанского дворца) は、ウファの軍政官 Д. Н. Горовиーンに対し、次のようなバシキール人の不満を引用して、移住者を領域の外に出すように命じている。「これらの移住したロシア人、タタール人、チュヴァシ人およびヴォチャーク人は、彼ら [バシキール人] の多くの村がある古来からの世襲領地に定住してしまっている。彼らは土地を耕し、干し草を刈り、養蜂に役立つ木々を含んだ森林を伐り、また標識の付いた木も伐採したのである。そして、彼らの世襲領地内の人々の数が多いため、あらゆる野性の動物たち、すなわち、へら鹿、熊、きつね、てん、りすは逃げ去り、ビーバーは絶えてしまった。彼らは動物たちを殺し

たり、魚をとったりし始めたのである。そして、馬群や家畜のための放牧の場所がなくなってしまった。それゆえ、我が大君よ、彼らは、ヤサークとすべての賦税を納めることができなくなったのである<sup>147)</sup>」と。ここでは、バシキール人は、単にロシア人に反対するのではなく、バシキーリアに流入してきたあらゆる人々に対して不満を述べている。蜂起の原因の第三には、前節でも述べたように、ロシア人官僚による圧迫やその地位を利用した職権濫用に対する反発があげられる<sup>148)</sup>。

1662年に始まったこの騒乱では、地方住民は、「教会を焼却し、破壊した。また、多くの村落や部落を破壊し、大量の血を流し、多くのロシア人を殺害し、捕虜とし、さらには多くの人々を〔奴隷として〕売ったのである<sup>149)</sup>。」

しかし、より注目すべきは、この叛乱は、バシキーリアの領域外まで飛び火し、他の辺境住民をも巻き込んだ運動にまで発展したということである。この機会をとらえて、前シベリア汗であったクチュム汗の後継者たちもこの争いに加わり、またシベリア道のバシキール人指導者もシベリア汗国の再興をうたって参加した<sup>150)</sup>。あるいは、当時すでにロシアとポーランドとの戦争に関わっていたクリミア汗国に助力を求めようとするバシキール人もいた。また、その行動にどれだけイスラム教という共通の宗教が影響を及ぼしていたか判断することは難しいが、本稿ですでに述べたように（第Ⅰ章1節）、モスクワ国家に対抗すべく16世紀のトルコの掲げたムスリムの統一という旗印も作用していたかも知れない<sup>151)</sup>。さらには、カルムイク人たちの動きも叛乱を一層複雑なものにしていた。彼らのなかには、バシキール人側につく者やロシア政府側につく者がいたのである<sup>152)</sup>。しかも、バシキール人自身もすべてが蜂起したのではなく、政府側に立つ者もいた<sup>153)</sup>。

叛乱は、上記のようなその構成と志向の複雑さもあって、少数のロシア軍によって鎮圧されたが、バシキール人は数年後また新たな叛乱を起こした。彼らは、1670-71年のステンカ・ラージンの叛乱に積極的に参加し、さらに1675-83年のセイトの乱と呼ばれる大辺境戦争をもひき起こしたのである<sup>154)</sup>。そして、18世紀に度々発生するバシキール人の叛乱は、ロシア政府の推進する植民政策との関連で考察しなければならないが<sup>155)</sup>、プガチョーフ叛乱の発生する18世紀後半まで間断なく続くのである。

## 結 語

以上、バシキーリア併合を具体的に検討しながら、ロシア国家の地方併合過程の様々な問題を考察してきた。その際、筆者は、併合を単に16世紀中葉だけの出来事としてとらえるのではなく、その後のロシア国家の植民政策（少なくとも、その開始期）までも視野に入れて考えようとした。なぜなら、併合は、単にそれだけで完結する歴史事象ではなく、ロシアの国内植民の始まりをも意味するからである。そして、この併合は、それに続く植民の展開に合わせて、地方社会を大きく変貌させ、また地方はロシア国家の構成部分としてしっかりと組み込まれていったのである<sup>156)</sup>。そして、バシキーリアの場合は、ロシア帝国にとってのその最初のケースとして、併合問題を考える上で大いに重要となろう。

また、我々は、バシキーリア併合について具体的に検討すると同時に、ソヴェト史学の

通説的解釈についても言及してきた。その「自由意志」説に関しても、より詳細に検討することにより、併合にあたってバシキール人とロシア政府それぞれの思惑の違いが存在したことを指摘した。また、併合以前と以後との地方社会の状況の比較についても、ロシア国家による併合後の方がバシキール人にとって好ましいとは必ずしも言えないことを、併合後のバシキール人の様々な変化を通してみてきたのである。

しかし、上記の点については、状況を示す史料しかなく、より明確な実体を示す史料を見出さなければならない。また、併合を積極的に推進した地方の社会層の志向分析、併合をめぐるバシキール人とロシア政府の具体的な協定内容の検討等は今後の課題となろう。

〔付記〕 本稿は文部省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

— 注 —

- (1) 16—19世紀におけるウラル、沿ヴォルガ、シベリア、ウクライナ、カフカース、カザフスタンおよび中央アジア諸民族の併合過程とロシアの多民族国家への変貌の歴史が、ロシア・ソ連史の重要で現実的な問題の一つであることは論をまたない（См. Р. Г. Кузеев, 《Добровольное присоединение Башкирии к Русскому государству—Поворотный пункт в истории края》.— в кн.: *Историческое значение добровольного присоединения Башкирии к Русскому государству*, Уфа, 1982）。
- (2) 不十分ながら、拙稿「プガチョーフ叛乱におけるバシキール人の参加過程」（『ロシア史研究』35号, 1982年）54—55頁を参照されたい。
- (3) Н. Г. Аполлова, 《К вопросу о политике абсолютизма в национальных районах России в XVIII в》.— в кн.: *Абсолютизм в России*, М., 1964, стр. 357.
- (4) 管見の限りでは、このテーマについての研究はない。
- (5) たとえば、バシキール人の場合に関しては А. Н. Усманов の研究, 17世紀のヴォルガとカルムイクアおよび1730—40年代のカザーフ（小ジュチと一部中ジュチについて）の場合に関しては Н. Г. Апполова の研究がある（А. Н. Усманов, *Присоединение Башкирии к Русскому государству*, Уфа, 1949 ; Его же, *Присоединение Башкирии к Русскому государству*, Уфа, 1960 ; Его же, *Добровольное присоединение Башкирии к Русскому государству*, Уфа, 1982 ; Н. Г. Аполлова, *Присоединение Казахстана к России*, Алма-Ата, 1948 ; См. *Известия АН Казахской ССР, Серия общественных наук*, 1982, No. 3）。
- (6) Н. Г. Аполлова, *Указ. стат.*, стр. 355-356. なお、本稿では《присоединение》の訳語に「編入」ではなく、「併合」をあてた。
- (7) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 3-4 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 5.
- (8) そのことは、次章2節で述べるように、バシキール人が民族意識を形成し得なかったことに影響を及したであろう。
- (9) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 3-4 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 5.

- (10) 「自由意志」説をとる歴史家には次のような人々がいる。В. Н. タチーシチェフ, И. К. キリーロフ, П. И. ルイチコフ, Н. М. カラムジーン, С. М. ソロヴィヨフ, Д. Н. ソコロフ, М. И. ウミドバーエフ, Р. Г. イグナーチエフ, Н. В. ウスチューゴフ, А. Н. Усмановなどである。
- (11) 「強制」説をとる歴史家には次のような人々がある。В. Н. ヴィテフスキー, В. А. ノヴィコフ, В. И. フィロネンコ, Ш. П. ティペーエフ, П. Ф. イシェリコフ, М. カルミン, Р. М. ライモフ, А. П. チェローシニコフなどである。
- (12) С. М. Соловьев, *История России с древнейших времен*, Кн. III, Т. 6, М., 1960, стр. 477.
- (13) В. Н. Витевский, *Н. И. Неплюев и его Оренбургский край в прежнем его составе до 1758г.*, Вып. 1, Казань, 1889, стр. 127.
- (14) ヴィテフスキーによると、「異族住民」とはここではバシキール人, メシエリヤーク人, チュヴァシ人, モルドヴァ人, チェプチャーリ, ボブイーリ, タタル人, カルムイク人およびキルギス人を指す (*Там же*, стр. 118)。なお, チェプチャーリとボブイーリについては, 不十分ながら拙稿「ロシアにおける植民問題」(『史観』112冊, 1985年) 93頁の注(32), (33)を参照されたい。
- (15) *Там же*.
- (16) А. П. Чулошников, 《Феодалные отношения в Башкирии и башкирские восстания XVII и первой половины XVIII в.》— в кн: *Материалы по истории Башкирской АССР*, Ч. 1, М.-Л., 1936, стр. 3-64.
- (17) Н. В. Устюгов, 《Башкирское восстание 1662-1664 гг.》 *Исторические записки*, 1949, Кн. 24, стр. 44.
- (18) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 20-21; *Его же*, *Добровольное присоединение...*, стр. 34-35. なお, Усманов自身には, バシキール併合について注(5)であげた三つの研究書があるが, 最初に書いた1949年のモノグラフでは「強制」説を採っていた。しかし, 1960年および82年のそれでは, Н. В. ウスチューゴフ, С. ニグマトウーリンおよび В. グレーデリの批判を受け入れて見解を変え, 「自由意志」説に立っている (*Там же*, стр. 35-36)。なお, 82年版のモノグラフは, 60年版を加筆・修正したものであるが, ことに, ウファ建設について新たな章が付け加えられているのが特徴である。
- (19) См. *Очерки истории СССР. Период феодализма. конец XV— начало XVII вв.*, М., 1955, стр. 674-682 (А. Н. Усмановと Н. В. Усチューゴフの共同執筆である); С. И. Руденко, *Башкиры (историко-этнографические очерки)*, М.-Л., 1955; *Очерки по истории Башкирской АССР*, Уфа, 1956, стр. 56-66 (なお, 執筆者は А. Н. Усмановである); Р. Г. Кузеев, *Очерки исторической этнографии башкир*, Ч. 1, Уфа, 1957; Р. Г. Кузеев и Б. Х. Юлдашбаев, *400 лет вместе с русскими народами*, Уфа, 1957 и др.
- (20) Р. Г. Кузеев и Б. Х. Юлдашбаев, *Указ. соч.*, стр. 50.
- (21) М. Х. Рахматуллин, *Население Башкирии в XVII-XVIII вв.*, М., 1988, стр. 21.
- (22) М. А. Усманов, *Татарские исторические источники XVII-XVIII вв.*, Казань, 1972, стр. 25.
- (23) E. J. Lazzerini, "Tatarovedenie and the "New Historiography" in the Soviet Union; Rising the Interpretation of the Tatar-Russian Relation," *Slavic Review*, vol. 40,

- No. 4, 1981 ; С. Х. Алишев, 《Присоединение народов Среднего Поволжья к Русскому государству.》 — в кн.: *Татария в прошлом и настоящем. Сборник статей, Казань, 1975 ;* 拙稿「バシキール人サラヴァト・ユラーエフ」(『ロシア史研究』42号, 1986年) 29—30頁。また, シベリア史における併合の意義については, 吉田俊則「シベリア植民初期のロシア人社会について」(『ロシア史研究』47号, 1989年) 42頁を参照されたい。
- (24) С. Х. Алишев, *Указ. стат.,* стр. 174-177 и далее.
- (25) *Там же,* стр. 181-182.
- (26) *Там же,* стр. 179.
- (27) *Там же,* стр. 180-183.
- (28) 1989年6月4日(日)(第2日目), 法政大学で行われた。なお, これは口頭での発言であり, しかも質問に対する返答という性格上, その内容は限定的にしか利用できないであろう。
- (29) Р. Г. Кузеев (Составление, перевод текстов, введение и комментарии), *Башкирские шежере, Уфа, 1960,* (далее — *Башкирские шежере*), стр. 8.
- (30) たとえば, В. Умартоフは伝承 (предание), Д. Н. Соколовは年代記 (летопись), Л. В. Росиэфスキーは編年誌 (хроника), П. С. Назаровは歴史記録 (историческая запись) とした (*Там же,* стр. 7)。
- (31) *Там же.*
- (32) *Там же,* стр. 9. こうした伝承史料としての《шежере》は, 単にバシキール人だけのものではなく, カザフ人, トゥルクメン人, キルギス人, モンゴル人および他の諸民族にも存在していた。しかも, それらは шежере, тайра, тарих 等の異なる名称を持っていた (*Там же,* стр. 10)。
- (33) 彼には, 注(29)であげた編集・翻訳書の他に, 次の一連の史料紹介がある。Р. Г. Кузеев, 《Башкирские шежере и присоединение Башкирии к Русскому государству》 *Советская этнография, 1957, No. 4 ;* Его же, 《Новые источники о присоединения Башкирии к Русскому государству》, — в Кн.: *Материалы научной сессии, посвященной 400-летию присоединения Башкирии к Русскому государству, Уфа, 1958,* стр. 3-22.
- (34) А. Н. Усманов, *Добровольное присоединения...*, стр. 20.
- (35) なお, クゼーエフによって編集されたものの他に, 種族によって異なる幾つもの《шежере》のヴァリエントが存在する (А. З. Асфандияров, 《Башкирские источники》 — в Кн.: *Историческое значение...*, стр. 19-20)。
- (36) Л. В. Черепнин, *Русская историография до XIX века, Курс лекция, М., 1957,* стр. 78-108 ; М. А. Усманов, *Указ соч.,* стр. 17.
- (37) *Историография истории СССР, I, М., 1961,* стр. 46-47. なお, 「モスクワ第三ローマ論」に関して, 邦語文献では次の論考がある。栗生沢猛夫「モスクワ第三ローマ理念考」(金子幸彦編『ロシアの思想と文学—その伝統と変革の道—』, 恒文社, 1977年)。
- (38) Л. В. Черепнин, *Указ. соч.,* стр. 42, 58, 93, 99, 112 и др.
- (39) *Очерки истории исторической науки в СССР, Т. 1, М., 1955,* стр. 77, 171-173.
- (40) Р. Г. Кузеев, *Добровольное присоединение...*, стр. 8.
- (41) 三橋富治男「オスマン帝国とヨーロッパ」(『岩波講座世界歴史』15, 岩波書店, 1979年),

422-424頁。

- (42) 阿部重雄「16・17世紀の東ヨーロッパ諸国」(『岩波講座世界歴史』15, 岩波書店, 1979年), 414頁。
- (43) Р. Г. Кузеев, *Добровольное присоединение...*, стр. 8 ; *Очерки по истории Башкирской АССР*, стр. 57 ; См. С. О. Шмидт, 《Предпосылки и первые годы Казанской войны (1545-1549)》, *Труды Московского гос. историко-архивного института*, М., 1954, Т. 6, стр. 192-194 (未見). また, 前掲拙稿「バシキール人サラヴァト・ユラーエフ」29頁をも参照されたい。
- (44) Р. Г. Кузеев, *Добровольное присоединение...*, стр. 8. まさに, この点こそ本文ですすでに述べたアリシェフの批判するところであろう。
- (45) 三橋富治男, 前掲論文, 431頁。
- (46) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 25 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 40.
- (47) *Там же*, стр. 41 ; Его же, *Присоединение...*, 1960, стр. 25. なお, 18世紀のオレンブルグ地方の地誌については次の研究を参照されたい。П. И. Рычков, *Топография Оренбургской губернии*, Оренбург, стр. 197-211.
- (48) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 26 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 41.
- (49) *Там же*, стр. 41-42 ; А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 26.
- (50) Б. Греков и А. Якубовский, *Золотая Орда и ее падение*, М.-Л., 1950, стр. 130.
- (51) В. В. Радлов, *Опыт славяра тюркских наречий*, Т. III, СПб., 1905, стб. 1629.
- (52) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 30 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 46.
- (53) *Там же* ; Его же, *Присоединение...*, 1960, стр. 30 ; *Очерки истории СССР, Период феодализма, IX-XV вв.*, Ч. 2, 1953, стр. 424.
- (54) 四道の地理区分については, *Материалы по истории Башкирской АССР*, Ч. 1, док. No. 28, стр. 135-140. を参照。また, 18世紀のそれについては, 拙稿「プガチョーフ叛乱前夜のバシキール人—その社会的変貌—」(『社会経済史学』49巻2号, 1983年) 56頁の地図を参照されたい。
- (55) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 30 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 47.
- (56) バシキール語で **би**, ロシア語で **бий** である。
- (57) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 27 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 42.
- (58) *Там же*, стр. 45 ; Его же, *Присоединение...*, 1960, стр. 29.
- (59) *Там же*, стр. 31 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 47-48.
- (60) 実に, 20世紀にいたるまでそうした状況は続いた (Alexandre Benningsen, S. Enders Winbush, *Muslims of Soviet Empire, A Guide*, London, C. Hurt & Company, 247-248)。
- (61) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 27 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 43-44.

- (62) Там же, стр. 53 ; Его же, *Присоединение...*, 1960, стр. 39 ; См. *История Татарии в Материалах и документах*, М., 1937, стр. 57-58.
- (63) П. И. Рычков, *Указ. соч.*, стр. 83.
- (64) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 39 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 58.
- (65) Р. Г. Кузеев, *Происхождение башкирского народа*, М., 1974, стр. 319-320 ; Его же, *Башкирские шежере*, стр. 145.
- (66) Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 9.
- (67) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 39-40 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 58-59.
- (68) カザン汗国の崩壊に関して、邦語文献として次のものがある。石戸谷重郎「16世紀中葉におけるロシアとカザン」(『奈良産業大学紀要』第2集, 1986年), 同「イヴァン四世の東方政策—カザン・アストラハンの併合—」(『奈良文化女子短期大学』第17号, 1986年)。
- (69) *Очерки истории СССР, Период феодализма. конец XV—начало XVII вв.*, стр. 350-351.
- (70) Там же, стр. 354.
- (71) Там же, стр. 354-355.
- (72) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 68 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 93. なお、オレンブルグを仲介とする18世紀のロシアと東方との交易の様子については次の研究を参照されたい。Г. А. Михалева, *Торговые и посольские связи России со среднеазиатскими ханствами через Оренбург*, Ташкент, 1982.
- (73) そのことは、ロシア・ソヴェト史学においてロシア帝国の多民族的性格を包括的に扱った研究がほとんどないという現状とも関連があろう。その最大の原因はロシア史学自体の伝統そのものにあつたといえる。国家学派の流れをくむ歴史家たちは、ロシア帝国による地方の征服過程とその発展に注目したが、19世紀の全欧的なロマン主義的傾向の影響を受けつつ、彼らは一種ナショナリストの立場から、ロシア国家の領土獲得の成功、その文明の進歩性、および世界史上におけるその役割を称えることに努めてきた。このことは、とりもなおさず、ロシア国家に抱摺された非ロシア民族やその社会に対する批判的な考え方・態度を彼らにとらせたり、帝国の発展にとっての諸民族の寄与を過少評価させたりもしたといえよう (J. Pelenski, *Russia and Kazan, Conquest and Imperial Ideology, 1438-1560s*, Mouton, 1974, pp. 2-3)。
- (74) А. Н. Усманов, *Присоединение*, стр. 64-68 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 93-97.
- (75) *Полное собрание русских летописей* (далее – ПСРЛ), М., 1965, Т. XIII, первая половина, стр. 230 ; См. *История Татарии...*, стр. 125-127. なお、アールスコエ地方はカザン汗国のなかで農耕を営むタタール人の一大中心地であつた (Там же, стр. 129, 134, примечание 3, 54)。
- (76) ПСРЛ, Т. XIII, первая половина, стр. 230.
- (77) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 75 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 104.
- (78) ПСРЛ, Т. XIII, первая половина, стр. 239.

- (79) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 76 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 104-105.
- (80) *Там же*, стр. 105 ; Его же, *Присоединение...*, 1960, стр. 77.
- (81) *История Татарии...*, стр. 124.
- (82) Н. М. Карамзин, *История государства Российского*, Т. IX, СПб., 1892, стр. 236-237 ; См. *История Татарии...*, стр. 127.
- (83) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 71-72 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 100-101.
- (85) なお, Башкиール人の《шежере》や18世紀の著述家たち (П. И. Рючикоф, И. К. Киреев, В. Н. Татарищев等) は, Башкиール人をノガイ人と区別していなかったのは注目すべきである (У. Х. Рахматуллин, *Указ. соч.*, стр. 20)。
- (85) *Там же*.
- (86) *История дипломатии*, Т. 1, М., 1941, стр. 201.
- (87) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 79 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 108-109.
- (88) Башкиール人はロシア人ツァーリをそのように呼んだ。
- (89) ヘジラ暦。西暦1552年にあたる。なお, 《шежере》のなかでは, 年号の誤まりが多くみられる。
- (90) イスラム教のこと。
- (91) *Башкирские шежере*, стр. 33.
- (92) *Там же*, стр. 33-34.
- (93) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 79 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 108-109.
- (94) *Башкирские шежере*, стр. 73-74, 78-79, 127.
- (95) Р. Г. Кузеев, *Добровольное присоединение...*, стр. 11.
- (96) *Там же*, стр. 12. また, Калумジーンはこの点について, 次のように記している。1557年春, 「彼 [イヴァン四世] は慈悲深くもモスクワに [Башкиール人] 最長老を受け入れ, 彼に特許状を与えた」と (Н. М. Карамзин, *Указ. соч.*, Т. VIII, СПб., 1892, стр. 138)。
- (97) *ПСРЛ*, Т. XIII, первая половина, стр. 281-282 ; См. Н. М. Карамзин, *Указ. соч.*, Т. VIII, стр. 117, 119, 137, 138, примечания, 346, 396, стр. 46, 53.
- (98) Р. Г. Кузеев, *Добровольное присоединение...*, стр. 12. なお, シベリアに関して, エルマークの有名な遠征の後も, ツァーリ政府およびその軍隊は, さらに長きにわたってシベリアの諸汗および民衆と闘わざるを得なかった。汗たちは, シベリア汗国内におけるウラル以東のБашкиール人に対する自らの権力を維持し続けようとしていた。しかし, シベリア汗国の征服とその後の崩壊の過程で, ウラルの北東および以東のБашкиール人たち (Кара-Тарбин, Сарыут, Сибиряк, Катай, Айおよびクデイの諸族等) は, モスクワに自分たちの使節を派遣して, ロシアのツァーリの臣下になるという希望を伝えたのである (А. Н. Усманов, *Добровольное присоединение...*, стр. 155-202)。
- (99) А. З. Асфандияров, *Указ. стат.*, стр. 21.

- (100) В. А. Новиков, *Сборник материалов для истории Уфимского дворянства*, Уфа, 1903, стр. 184.
- (101) См. Р. Г. Кузеев и Б. Х. Юлдашбаев, *Указ. соч.*, стр. 5.
- (102) *Материалы по истории Башкирской АССР*, Ч. 1, док. No. 119, стр. 259.
- (103) А. Н. Усманов, *Добровольное присоединение...*, стр. 111-113.
- (104) А. Н. Усманов, *Добровольное присоединение...*, стр. 113 ; *История Татарии...*, стр. 123-124.
- (105) Н. М. Карамзин, *Указ. соч.*, т. VIII, стр. 117.
- (106) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 139.
- (107) Д. Н. Соколов, *Оренбургская губерния*, М., 1916, стр. 85-86.
- (108) Биков, «Башкорды : Материалы по истории башкирского народа», *Оренбургская газета*, 1899, No. 773.
- (109) *Там же*, стр. 186 ; Его же, *Присоединение...*, 1960, стр. 138 ; *История Татарии...*, стр. 123-124. 後年, バシキール人が自分たちの土地に対する権利の依り所としたのが1552年および1695年のツァーリの特許状であった (А. З. Асфандияров, *Указ. стат.*, стр. 21)。
- (110) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 138-139 ; Его же, *Добровольное присоединение...*, стр. 114.
- (111) バシキール人に課されたヤサークと軍役について, タタールの年代記は次のように伝えている。「[バシキール人たちは, ツァーリに] 臣従するという約束を与えた。平和の印を示しながら。また, 彼らは自分の土地に多くの動物がいると語った。各戸から動物の毛皮を我々は与える。我々のなかのある者は軍役を遂行するだろう」と。そして, 彼らは「ビーバーの毛皮を与えた。……他の森に住む動物の毛皮を [も与えた]。また, ある者たちは軍務に服したのである」と (*История Татарии...*, стр. 123-124)。
- (112) В. Д. Дмитриев, «О ясачном обложении в Среднем Поволжье», *Вопросы истории*, 1956, No. 12, стр. 107-115.
- (113) Р. Г. Кузеев, *Очерки...*, стр. 130-131.
- (114) 前掲拙稿「18世紀ロシアの植民問題」89頁を参照されたい。
- (115) Р. Г. Кузеев, *Очерки...*, стр. 133.
- (116) *Там же*.
- (117) *Там же*, стр. 134.
- (118) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 143-144.
- (119) *Материалы по истории Башкирской АССР*, Ч. 1, док. No. 25, стр. 130.
- (120) その顕著な例として, 多くの企業心に富むロシア人に対するツァーリの特許状付与をあげることができる。特に, 1558年イヴァン四世はロシア人商人で企業家のストローガノフ家にカマ川沿岸の広大な地域を与えた。バシキール人の土地の一部も徐々にストローガノフ家の所有に帰していったのである (Г. Г. Кузеев, *Очерки...*, стр. 134)。
- (121) この布告の内容については, 不十分ながら前掲拙稿「18世紀ロシアの植民問題」85頁を参照されたい。
- (122) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 140-141.
- (123) *Там же*, стр. 141-143.

- (124) *Там же*, стр. 147. ロシア政府の民族地域に対する支配の方法としては、民族毎に異なる政策をとり、民族間の連帯を阻止するというのが伝統的な方法であるが、一つの民族に対してさえその政策は一様ではなかった。そこに、ロシア政府による民族支配の巧妙さを見ることができる。
- (125) Р. Г. Кузеев, *Очерки...*, стр. 134.
- (126) А. Н. Усманов, *Присоединение...*, 1960, стр. 282.
- (127) П. И. Рычков, *Указ. соч.*, стр. 371-372.
- (128) А. Н. Усманов, *Добровольное присоединение...*, 1960, стр. 158.
- (129) *Там же*, стр. 281-292.
- (130) Р. Г. Кузеев, *Очерки...*, стр. 123.
- (131) *Там же*, стр. 128-129.
- (132) *Там же*, стр. 159.
- (133) *Там же*, стр. 160.
- (134) *Там же*, стр. 129.
- (135) *Материалы по истории Башкирской АССР*, Ч. 1, док. No. 24, стр. 126.
- (136) В. А. Новиков, *Указ. соч.*, стр. 10.
- (137) *Материалы по истории Башкирской АССР*, Ч. 1, док. No. 48, стр. 171; また、18世紀に関しては、次を参照されたい。*Материалы по истории Башкирской АССР*, Т. III, М., 1949, док. No. 559, стр. 506, док. No. 566, стр. 517-520, док. No. 567, стр. 524, док. No. 569, стр. 536-539.
- (138) *Материалы по истории Башкирской АССР*, Ч. 1, стр. 150-494.
- (139) См. Н. В. Устюгов, *Указ. стат.*, стр. 44.
- (140) *Материалы по истории Башкирской АССР*, Ч. 1, док. No. 44, стр. 164-165, док. No. 57, стр. 186-187.
- (141) Г. Ф. Миллер, *История Сибири*, Т. 1, М. - Л., 1937, стр. 211, док. No. 4, стр. 338.
- (142) A. S. Donnelly, *The Russian Conquest of Bashkiria, 1552-1740*, New Haven, 1968, pp. 20-21.
- (143) *Материалы по истории Башкирской АССР*, Ч. 1, док. No. 37, стр. 155-156.
- (144) A. S. Donnelly, *op. cit.*, p. 21.
- (145) *ibid.*
- (146) Н. В. Устюгов, *Указ. стат.*, стр. 55-58; A. S. Donnelly, *op. cit.*, p. 22.
- (147) *Материалы по истории Башкирской АССР*, Ч. 1, док. No. 13, стр. 82.
- (148) A. S. Donnelly, *op. cit.*, pp. 22-23.
- (149) *Материалы по истории Башкирской АССР*, Ч. 1, док. No. 52, стр. 178.
- (150) A. S. Donnelly, *op. cit.*, p. 23.
- (151) Н. В. Устюгов, *Указ. стат.*, стр. 65; *Материалы по истории Башкирской АССР*, Ч. 1, док. No. 47, стр. 169.
- (152) *Там же*, док. No. 42, стр. 163, док. No. 52, стр. 178-179; Н. В. Устюгов, *Указ. стат.*, стр. 89.

- (153) A. S. Donnelly, *op. cit.*, p. 25.
- (154) *Ibid.*, pp. 25-26.
- (155) この点については、不十分ながら次の拙稿を参照されたい。前掲拙稿「プガチョーフ叛乱前夜のバシキール人」、同「ロシアにおける植民問題」。
- (156) ロシア帝国の併合から植民の政策過程について要領よくサーヴェイしてあるものに次の論文がある。M. Raeff, "Pattern of Russia Imperial Policy toward the Nationalities," in Edward Allworth (ed.), *Soviet Nationality Problem*, London & New York, Columbia Univ. Press, 1970.

## The Process of Annexation of the Periphery by the Russian Empire :A Case of Annexation of Bashkiria

Koichi TOYOKAWA

The purpose of this paper is to clarify the historical process of the annexation of the Bashkiria. In this paper, the process will be examined as the first step of the colonization by the Russian Empire which took place from the middle of the 16th century to the second half of the 18th century.

The paper consists of the following parts :

Introductory Note

I The Social Situation on the Eve of the Annexation

II On The Process of the Annexation

III Some Changes after the Annexation

Conclusion

The study on the annexation of Bashkiria has been made since the 19th century. The annexation has been regarded either : Bashkiria was compelled to be annexed by the Russian Empire ; or this region joined the Empire of its own will by the second half of the 16th century. Presently, the majority of the Soviet historians stand on the latter position. However, several scholars such as S. Kh. Alishev stand against this point of view. Concerning this matter, we have two kinds of materials, namely, the oral tradition of the Bashkir people, *Schejere*, and the Russian chronicles.

The international situation before the annexation around Bashkiria was much complicated. The relation between the Ottoman Empire and the Muscovite State had been peacefully good through commerce. But Turkey was a threat to Muscovy. As a matter of fact, Turkey tried to make an anti-Russian block covering the Khanate of Kazan, the Crimean Khanate, the Khanate of Astrakhan, and the Nogay Horde. At that time, Bashkiria was divided and ruled by these powers except the Khanate of Astrakhan under the influence of Turkey. Therefore, the Bashkirs could not found the unified political organization and mechanism for themselves. The Muscovite State, seeking its own interests in the East, took an aggressive attitude toward the Khanate of Kazan, whose position was against the State.

The process of the annexation is described in *Schejere*. The Whole Bashkiria was annexed into the Muscovite State by the end of the 16th century. The majority of the Soviet historians do not regard the annexation as the conquest by Ivan IV, but as the Bashkirs' joining into the Muscovite State voluntarily as mentioned before. However, examining the point carefully, we may find that both the Bashkirs and the Muscovite State had their own intention

of the annexation. For the Bashkirs, it was to secure their lives, the hereditary lands, the Muslim religion, and liberty. And for the Muscovite, it was to seek the state's interests. Because these intentions were satisfied to a certain extent, the annexation was made peacefully on the surface.

After the annexation, some changes soon began in Bashkiria. At first, the relationship between the Russian Empire and the Bashkirs changed into the ruler-subordinate relationship through the system of the *iasak*-payment — which taxed the Bashkirs' production of animal fur — , and the military service. Secondly, encouraged by the Russian government, division of the social stratum developed rapidly in Bashkiria. The ruler-subordinate relationship also developed much more than before the annexation. Thirdly, as soon as the Russian government began to take the first step toward the annexation, the Bashkirs started a movement against it. We can find many uprisings against the Russian colonial policy even before the Pugachev revolt in the second half of the 18th century.

From these points of view, we can conclude that the annexation of Bashkiria is to be regarded as first step of the colonization, and that many changes in this area seen from the second half of the 16th century to the second half of the 18th century are to be examined carefully.